

知的障害者の意思決定支援における多層的關係性構造の実証的研究 —本人、親、支援者によるグループインタビューのエピソード記述から—

○ 日本福祉大学大学院 氏名 小林麻衣子（会員番号 9749）

キーワード：知的障害者、意思決定支援、エピソード記述

1. 研究目的

本研究は、知的障害者の意思決定支援における親や支援者の關係性の影響を包括的に理解し、意思決定支援の方法論において実践的な示唆を得るために、知的障害者、親、支援者の多層的な關係性の構造を実証的に明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

意思決定は単なる個人の選択ではなく、周囲の人々との相互作用の中で形成されるプロセスである。そのため、關係性の視点から意思決定支援の方法を検討する必要がある。知的障害者の意思決定支援の方法には、以下の三つの視点がある。第1に知的障害者本人（以下、本人）が自ら決定する力を育む視点で、教育分野で方法論に研究の蓄積が多くある。第2に親子關係を考慮した視点で、親の継続的支援や親亡き後のケアの社会的支援に関する研究がある。第3に支援者との關係視点であり、支援者との非対称な關係についての研究がある。また支援の担い手として相談支援専門員は重要な役割を果たす。先行研究からは意思決定支援において、本人、親、支援者の各視点の重要性が示され研究の蓄積がある。しかし、各視点を統合した多層的な關係性の構造を捉えた意思決定支援の研究は十分検討されていない。森口（2021）は本人、家族、支援者の各インタビューを通じて自立について關係性の変容であると明らかにしているが、本研究では、これを踏まえ、本人、家族、支援者の影響を及ぼし合う者同士が、意思決定支援における同一のエピソードについて同時に語ることを通じて、事象を多面的に把握しその關係性の構造を明らかにする。

調査方法は、住まいの選択という意思決定支援場面の経験のある本人と親、相談支援専門員にグループインタビューを実施し、エピソード記述（鯨岡 2005）により分析する。エピソード記述により、具体的に事象を記録することで、視点の多面性を取り入れ、間主観性を捉え、実践の振り返りを通じて關係性の構造理解を深める。

調査協力者の選定基準は、プレインタビューにより住まいを決める経験、信頼關係構築、意思の表出があることについて確認出来た対象者の3組とした。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本福祉学会研究倫理指針を遵守している。また、日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（22-007）を受けた。開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

（1）3組の語りにおける分析結果の一部

① 本人の意思が育まれる：Aさんは控えめで慎重な性格が親と支援者に認識されている。保護的な関わりにいる本人は熱望する意思が見受けられない。グループホーム体験は「や

るしかないかな」と語り行動を移す自信がない。親と支援者はその不安を感じつつ積極的な働きかけを行っているように感じた。「関係性で育まれる本人の意思」と意味づける。

②親への間接的な自己主張：Bさんは母が購入するものを「嫌なことをいやだって言えない」と使わず廃棄すると語る。母は、本人は嫌な時は折れないと感じている。これは関係性の中で自然に伝わり、影響を及ぼしあうと見えた。「間接的な自己主張」と意味づける。

③本人の能動的欲求、親の保護的立場、専門職による支援の交錯：Cさんは「キャリアケースが欲しい」と自己の欲求を表出する。親は保護的立場から口出しをし、支援者は「自分のお金で買うのだから買わせて」と親と関係性を壊さぬよう親に促す。それぞれの関係性が複雑に絡み合っているように見えた。「能動的欲求・保護・支援の交錯する関係性」と意味づける。

④自己実現への協働：Bさんは、「存在感が消えないようにしたい」と語り、Cさんは「明るい髪色にしたことを職場から止められたことは差別だ」と語り、支援者はそれらを受けて一緒に歩むことを語る。本人の自己実現の願いに支援者が協働していくように見えた。「自己実現の追求に向けた支援者との協働」と意味づける。

（2）了解可能性のある3組の共通した結果

本人、親、支援者の関係性は、本人が他者との関係性の中で意思を育くむプロセスで変容する。意思決定は日常生活の些細な選択から始まり、親の影響を受けつつ繰り返される。親の対応や支援者の関与が変容しつつ、間接的な自己主張が見られる。互いの衝突や調整を繰り返し、本人、親、支援者の立場は交錯している。さらに、本人の自己実現の欲求が強く表出されつつ協働に進む。以上から、意思決定支援における本人、親、支援者の関係性は、複数の要素が重なっており、影響を及ぼし合い変容し、複雑に絡み合い交錯し協働へと進んでいた。

5. 考察

関係性において意思が育まれることや本人の自己主張、支援者との協働は、先行研究とも合致する。本研究では、意思決定支援において、本人、親、支援者の関係性が能動的欲求・保護・支援の役割により複雑に絡み合い交錯していた。そして、それぞれが協働に向かい、変化が絶えず進行するという動的な変容を示す構造であることを新たに明らかにした。とりわけ、本人の間接的な自己主張や能動的欲求に対する親の保護的立場との摩擦、そこに介入する専門職である支援者の関係性においては、衝突や調整を経ながら再構成されるプロセスが確認された。これは、支援が一方向的に提供されるのではなく、交錯しつつ相互の応答を通じて関係性が再編される動的な構造であることを示していた。

【文献】

鯨岡（2005）『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会。

森口（2021）「知的障害者の「関係性の変容としての自立」についての考察-家族・本人・支援者のインタビューをとおして-」『天理大学社会福祉学研究室紀要』23, 27-37。